

高等学校段階における卒業論文カリキュラムの検討

大貫 眞弘・竹林 和彦

キーワード：高等学校、卒業論文、カリキュラム、文章作成技術、探究心、問題発見・解決能力

【要 旨】 高等学校段階で「卒業論文」「卒業研究」を課している学校が多くなっている。それらの学校でのねらいは、①生きていく上で求められる探究心や知的好奇心を涵養すること、②高校卒業後に執筆機会が増える論文やレポートなどの文章作成技術を高校生段階のうちに身につけさせること、③大学進学時の「ハードル」としての役割を卒業論文に担わせることなどである。

しかし、「総合的な学習の時間」などで行われるこの一連の研究のカリキュラムは各校独自のものであり、特定の学校でのみ可能なカリキュラムである場合が多い。そこで、本研究では、高等学校段階での「卒業論文」作成が持つ教育的な意味と効果を明らかにし、多くの高等学校で導入が可能なカリキュラムの検討を行った。

高等学校段階での「卒業論文」実施校は、①「課題研究」などで扱う総合学科が設置されている高等学校、②「総合的な学習の時間」などで扱う大学附属校、③「総合的な学習の時間」で扱う中高一貫校が主で、論文作成までに1年から2年ほどの時間をかけている。しかし、一連の指導課程が教師や生徒の実情に合っていないために、教師にとっても生徒にとっても達成感のある成果となりえていない場合もある。他方、しっかりとした研究動機を持ち、意欲的に研究に取り組んだ生徒の満足度は高く、探究心や知的好奇心が涵養され、問題発見・解決能力を習得し成果がみられる。

多くの高等学校で導入が可能で効果的なカリキュラムは、①生徒のモチベーションを高く維持できるもの、②書くための方法（テクニカルなもの）がわかるもの、③教員の負荷が大きくなりすぎないもの、④教員間の指導の違いを少なくできるもの、⑤生徒の自主性が発揮できるものが求められよう。そこで、取り組む期間と時期、指導の形態、配当時間、発表の場などの観点から高等学校段階における「卒業論文」カリキュラムの提案を行った。

1. はじめに

卒業論文という高等教育課程の中で最後の集大成として取り組むものという感があるが、現在、高等学校を中心にした中等教育の場でも、「卒業論文」の執筆、もしくはそれに相当する課題を生徒に課す学校が増えている。この課題は、「総合的な学習の時間」における学習の総まとめとして位置づけられたり、総合学科が設置された学校における学習の総まとめとして位置づけられたりしていることが多い。2008年に筆者が行った各高等学校のホームページでの調査によると、「卒業論文」を導入していると表記してある高等学校は154校あり⁽¹⁾、「卒業論文」ではなく、「卒業研究」やその他の名称を用いて実施している高等学校を考慮すると相当数の学校が、高等学校段階で「論文」を課している。

このような動きは、高等教育の場では歓迎されるべきことである。筆者の経験では、大学1、

2年時で課すレポートを見ると、参考文献を明記してあるレポートは、その明記を指示しない限り数えるほどで、文献の引用方法も、引用部分がどこなのかわからない書き方をしているものが多く、いわゆるレポートの書き方というテクニカルな部分ができている学生が目につく。他方、論理的な文章構成ができている学生もあり、大学入試を突破できる知識や能力を持っている、出された課題やテーマに関して様々な資料を使い、論理的に文章を構成できる問題解決能力が不足している学生が見受けられる。また、大学に進学した卒業生からも「課されたレポートをどう書けばいいかわからない」「大学でレポートの書き方の指導がないのでどうすればいいか」といった声も届く。

このような状況を解決する策として、高等学校段階で「卒業論文」「卒業研究」を取り入れることは大いに意義がある。しかし、高等学校で「卒業論文」「卒業研究」を課す立場から考えると、授業運営の中で多くの障壁に行き当たることも事実である。

筆者は、中学校・高等学校で教鞭を取りながら、大学でも授業を担当する機会を得ている。そのため、中等教育現場から高等教育の問題を見ることができる立場にあり、逆に、高等教育現場から中等教育の問題を見ることができる立場にもある。今回の筆者の問題意識は双方の立場に身を置くことから生じたものである。

中等教育における授業の充実、高等教育における授業の充実、中等教育と高等教育の有機的な接続、という3点を考慮に入れながら、高等学校段階での効果的な「卒業論文」指導の方法を検討したい。

2. 本研究の目的と先行研究

中等教育における「卒業論文」の在り方や指導方法については、すでに「卒業論文」を導入している学校の教員らによって、実践例や評価の方法、およびその問題点がいくつか指摘されている。高等学校では、筑波大学附属坂戸高等学校や東京大学教育学部附属中等教育学校、名古屋大学附属高等学校、専修大学附属松戸高等学校での報告があげられよう。また、中学校では、広島大学附属福山中学校の報告例があげられる。それらの報告書では、それぞれの学校における取り組みの紹介、実践例、評価の方法と問題点が、指導する教員や生徒のアンケートを元にまとめられている。

筑波大学附属坂戸高等学校の報告⁽²⁾では、指導のねらい、評価方針・評価の観点、学習指導の流れ、ケーススタディ、生徒のアンケートの分析、総括・今後の課題がまとめられ、「レポートの書き方」の指導上の問題点、「テーマの設定」問題点、「評価の仕方」の問題点が指摘されている。特に教員側の支援の方法の難しさが指摘され、「結論にいたるまでのプロセス」の大切さが強調されている。名古屋大学附属高等学校での報告⁽³⁾では、「卒業論文」作成を通して、大学に合格する学力にとどまらない、進学後も活躍できる「確かな学力」や「生きる力」の獲得の効果が指摘されている。高橋(2002)⁽⁴⁾は、東京大学教育学部附属中等教育学校の「卒業研究」を事例に、研究テーマ設定の大切さと教員の支援の大切さを指摘している。

それらの報告に目を通す限り、各学校での取り組みや問題点を指摘しているものの、それらはあくまでも各学校の実情を鑑みた報告・検討であり、高大連携の中で高等学校段階の「卒業論文」

が持つ意義の提示ではなく、また、現在は「卒業論文」をカリキュラムに含めていない学校が今後の導入を検討する材料の提示とはなり得ていない。

筆者が前節末に挙げた3点を考慮に入れる以上、特定の学校でのみ可能なカリキュラムを検討・開発することは無意味である。高等学校段階での「卒業論文」作成が持つ教育的な意味と効果を明らかにし、多くの高等学校で導入が可能なカリキュラムの検討を本研究の目的としたい。

3. 高等学校段階での「卒業論文」実施校とその現状

(1) 高等学校段階での「卒業論文」実施校

2008年度、2009年度の早稲田大学教育総合研究所における研究報告⁽⁵⁾で指摘したように、現在、高等学校で「卒業論文」、「卒業研究」を導入している学校は大きく3つのタイプがある。すなわち、「卒業論文」を①「課題研究」などで扱う総合学科が設置されている高等学校、②「総合的な学習の時間」などで扱う大学附属校、③「総合的な学習の時間」で扱う中高一貫校、である。その他に例外的に、各教科（特に地歴・公民科）の授業の一環として「卒業論文」を課している高等学校もある⁽⁶⁾。

それらの高等学校が卒業論文を課すことのねらいは、大きく次の3つに分けられる。

- ①生きていく上で求められる探究心や知的好奇心を涵養する。
- ②高校卒業後に執筆機会が増える論文やレポートなどの文章作成技術を高校生段階のうちに身につけさせる。
- ③大学進学時の「ハードル」（高校での学習の集大成）としての役割を卒業論文に担わせる。

このうち、①のねらいは、総合学科での「課題研究」の目標としてあげられる「多様な教科・科目の選択履修によって深められた知的好奇心等に基づいて自ら課題を設定し、その解決を図る学習を通じて、問題解決能力や自発的、創造的な学習態度を育てるとともに、自己の将来の進路選択を含め人間としての在り方生き方について考察させる」⁽⁷⁾ことを念頭に総合学科が設置されている学校での一番目のねらいとしてあげられることが多い。もちろん、このことは「総合的な学習の時間」の目標と通じるものでもあり、すべてのタイプの学校であてはまるねらいでもある。また、③は特に大学附属校のねらいとされることがあるほか、AO入試の対策として「卒業論文」を利用する生徒が多い高等学校でのねらいとしても指摘することができる。①③ともに、カリキュラム開始時に生徒に「ねらい」として知られることとなる。一方で、②は、カリキュラム開始時に生徒に対して「ねらい」として明確にあげられていることは少ない。

(2) 高等学校段階での「卒業論文」実施の現状

ここでは、筆者の勤務校、インタビューを行った学校および研究成果が公表されている学校の現状をもとに、高等学校段階での「卒業論文」実施の現状を、①「卒業論文」の配当時間、②指導の形態、③「卒業論文」に取り組む期間と時期、の3つの視点から整理する。

①「卒業論文」の配当時間

高等学校段階での「卒業論文」は、総合学科での「課題研究の時間」、「総合的な学習の時間」が当てられていることが多い。そのため、週当たりの配当時間は1～5時間と各校でまちまちで

ある。学校によっては、「卒業論文」の執筆・指導に使うための「総合的な学習の時間」が、校外研修などの事前・事後学習の時間にあてられてしまい、週1時間の確保さえ難しい学校もある。また、高等学校でも1コマが45分と短い学校や、1コマが50分であっても2コマ続きで授業が確保できない学校では、十分な指導や議論の時間が確保できない場合もある。

②指導の形態

最も多い授業形態は「ゼミ形式」授業である。系統もしくはテーマごとに分かれ、ゼミを作り授業が進められることが多い。また、導入時や発表会では、学年全体での講義形式、発表形式がとられることが多い。発表時は、ゼミ内のみ、学年全体、学校全体、外部にも公開する場合と様々な形態が取られている。ゼミ内の発表時以外の発表者はほとんどの学校が優秀者のみに限られていることが多い。

個々の生徒への指導は、当然のことながら、授業内では十分な時間が取れず、結果、昼休みや放課後、および夏休みなどの長期休業を利用した指導になっている。

教員一人当たりの担当生徒（ゼミあたりの人数）も各校まちまちである。平均的には、10名ほどだが、学校によっては20名を超える学校もあった。

③「卒業論文」に取り組む期間と時期

総合学科や大学附属校では、高校3年時に完成させる場合が多い。他方、中高一貫校では、3年時では大学入試に重点が置かれるため、1年時もしくは2年時に完成させる場合が多い。論文完成までにかかる時間はまちまちで、最も短い学校は3カ月、長い学校では3年である。多くの学校が1～2年であり、学年をまたいで論文執筆に取りかかっている。

4. 高等学校段階での「卒業論文」指導の問題点

前節に挙げたねらいの下で、各学校で「卒業論文」がカリキュラムに組み込まれ、生徒たちは「卒業論文」に取り組んでいるが、そこで行われる一連の指導課程が教師や生徒の実情に合っていないために、教師にとっても生徒にとっても達成感のある成果となりえていない場合が多い。このような事態が発生する背景には、高校生に対する論文の指導法や教育課程が存在せず、個々の学校、個々の教員が手探りの状態で指導を行っているという実態がある。そこで、高等学校段階での「卒業論文」指導の問題点を教員が抱える問題と生徒が抱える問題に分け、整理することとする。また、それとは別に、高等学校段階で「卒業論文」を課す時に生じる施設面での問題点にも言及する。

教員の問題点については、実際に生徒が論文を書いている実践校へのインタビュー⁽⁸⁾および筆者らの勤務校における実態から問題点を明らかにし、生徒側の問題点は早稲田大学高等学院および渋谷教育学園渋谷高等学校の生徒へのアンケートとインタビューを元に行っている。

(1) 指導する教員が抱える問題点

①論文執筆経験・指導経験の無さ

高等学校の現場では、教員が教材研究や生徒指導に時間を割かれ、研究活動を日常的に行っていない場合が多い。また、大学で卒業論文が必須ではなく論文を書いた経験がない教員や、長期

間論文執筆に携わっていない教員など、日常的に論文を書くことから遠ざかっている教員も多い。そのような教員にとって、論文指導は手探りのものとなり自身の経験を生かすことができない事態が生じる。

②教員自身が論文を書いた時とは異なる情報収集環境

現在は、インターネット上で多くの情報が収集でき、指導教員が大学や大学院で研究論文を書いていた時とは参考資料や論文の収集法が大きく異なっており、情報収集の環境の違いを感じる教員も少なくない。

③論文執筆の指導法が確立されていない現状

いわゆる「論文の書き方」を示した参考文献の類も、主に大学生向けに書かれたものがほとんどで、高校生の実態には適しておらず、提出された論文の添削に悪戦苦闘するといったコメントも多い⁽⁹⁾。高等学校段階での研究や論文指導について論じられた書物がほとんどなく、そのため、教員は独自の指導方法にならざるを得ず、効果的な指導方法が議論されることが少ない。

④指導の時間の無さ

インタビューの中で指摘された問題点の中で、最も多く挙げたのは「指導する時間の無さ」である。放課後や長期休業の間でも、部活動指導などでまとまった時間が取れず、指導の時間の無さを問題にあげる教員が多かった。筆者の経験でも、高校生が論文を書く場合の方が、大学生が論文を書く場合よりもより多くの助言を教員に求める傾向にある。また、担当する生徒数が20名近い教員もあり、生徒一人一人への指導が満足に行えていない学校もある。

⑤目標（完成度）のあいまいさ

高校生の論文において、目標をどこに設置すべきか明確にされないまま論文指導を行わなければならない、教員間で求めるものが異なり、生徒に不公平さを感じさせてしまい、どこを研究（論文執筆）の到達点とすべきか戸惑う教員もいる。

⑥評価のあいまいさ

評価のあいまいさを問題点としてあげた教員は、上記⑤の目標（完成度）のあいまいさ同様、高校生にとっての「卒業論文」を書く過程の中で、何をどのように評価すべきといった評価方法に困難さを感じていた。できあがった論文の完成度ばかりでなく、その過程をどのように評価できるかを主観的な見地でみるほかないからであろう。

⑦テーマの多様さ

生徒たちがテーマを決め、それを元に指導教員が決定していく方法をとっている学校では、指導する生徒数のバランスの公平さを求める結果、担当した生徒のテーマが多様で、専門外のテーマを指導しなくてはならない状況に置かれている教員もいた。また、ゼミ形式で生徒たちがディスカッションを行うときも、テーマがばらばらで議論が活発にならないことも問題点として指摘されていた。

(2) 生徒が抱える問題点

①時間的制約

高等学校では、生徒は定期試験や卒業後の進路準備の傍らで「卒業論文」を仕上げなければな

らず、大学生よりも時間的制約が大きい。また、文化祭や研修旅行などの学校行事の準備に時間を割かれることも多く、継続的な研究や論文執筆の時間確保が難しいことが問題点として挙げられた。

②テーマ設定の難しさ

高校生にとって取り組むテーマの設定は困難を極めている。自由な課題設定であればあるほど「問い」を立てることが出来ず、漠然とした問いになってしまう。その結果、何を明らかにすればよいか明確にならず、研究が進まない生徒も多い。各学校の「卒業論文」題目一覧を見ても、明らかに問いを立てることに失敗したと思える題目が見受けられる。多くの研究で指摘されているように、問いを立てることに不慣れな生徒が多く、また、その指導方法も確立されていないことが見受けられる。表1は、A高等学校の1クラスの「卒業論文」題目一覧の一部である。「時」、「メンタル」、「サプリメント」などの題目をつけた生徒は、問いを立てる作業に十分な時間を割けなかったか、指導がうまくいかなかったかのどちらかと考えられる⁽¹⁰⁾。

表1 A高校の「卒業論文」タイトル (2007年度、1クラス分の一部)

現代のプロ野球事情	サプリメント
子供の体力低下	野球の歴史
ユニバーサルデザインについて	日本のミサイル防衛システムについて
ロックの歴史	老犬にとって負担のかかりにくい生活
二輪走行ロボットにおけるPIDパラメータの自動調節	メンタル
卓球とテニス	安眠のすすめ
時	魔術
日本サッカーの発展について	機械とバイオテクノロジーの再生医療
マーケティングによる色彩効果	日本語の移り変わり
日本の社会保障	トポロジー結び目理論
日露戦争	人間の記憶力の低下

※1クラス分の題目のうち、出席番号偶数者だけを抜粋した。

③モチベーションの低さ

ほとんどの高等学校の「卒業論文」の完成時は、高校2年生の夏休み以降か高校3年時である。大学受験を控える生徒にとっては、大学入試科目には直接関係がない「卒業論文」にモチベーションを見いだせない生徒も数多く見受けられる。現行の大学受験制度の中では、AO入試に「卒業論文」がかりうじて使用できる状況であり、模試の結果など、具体的な数値として直接反映されない。そのため「卒業論文」にかかわる研究活動は、課されているので仕方なくこなすだけで、いわゆる「やっつけ仕事」になっている生徒も少なくない。

大学附属校でも、希望学部の特選条件に「卒業論文」が十分に反映されていない場合、モチベーションが上がらないこともある。さらに、推薦条件になっていても、評価が甘い先生の指導を受

けるためのモチベーションは上がるものの、研究・執筆へのモチベーションは低いままの生徒も見受けられる。

④研究方法・論文執筆の未習

首尾よくテーマが決まったとしても、立てた「問い」に対して答えを出すための研究方法を見つけ出せず、また、工夫できずせっかくのチャンスを逃している生徒もいる。それらの生徒は問題解決のためのノウハウがわからず、四苦八苦しているうちに時間ばかり過ぎてしまう。

さらに、十分な資料を集め、しっかりとした研究が行えたとしても、それらの結果を表現する段階において、論文を書くテクニカルな部分の未習によって、せっかくの研究が台無しになってしまう例も見受けられた。テクニカルな部分での問題点で多くの生徒が困っていることに、引用をどのように行い、自身の意見と他者の意見を区別するかがあげられた。

(3) 研究環境（施設面）の問題点

一部の学校を除き、大学と同じような研究環境を望めないことは自明のことである。特に、実験を伴う研究においては、施設の不十分さが指摘できる。なんとか工夫をこらし、実験を行う生徒もいるが、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定などを受けない限り、実験を伴う「卒業研究」や「卒業論文」は少ない。

また、多様なテーマに対応するだけの蔵書数は、高等学校の図書館にはない。大学附属校で高校生も大学図書館を使用できる状況であればいいのだから、多くの学校はそのような状況にはない。公立図書館の利用や高大連携による大学図書館の利用も紹介されているが、情報の宝庫である充実した図書館が、すぐに利用できる校内に設置されているか否かは大きな問題である。

5. 高等学校段階での「卒業論文」作成が持つ教育的な意味と効果

ねらいの一つである「生きていく上で求められる探究心や知的好奇心を涵養すること」など長期的な意味での「卒業論文」作成が持つ教育的な意味と効果を検証することは、短期間でおこなった本研究で結論を出すことはかなり難しい。しかし、短期的に効果をあげている例はいくつかあげられる。

筆者が、早稲田大学で学生に課したレポートを読むと体裁もしっかりしており、参考文献や引用の仕方もきちんと書けている1・2年生のものがある。彼らにどこで、レポートの書き方を学んだか問うと「高校の時レポートの書き方を学んだから」、「『卒業論文』を高校の時に書いたから」という答えが返ってくることが多い。体裁がしっかりしている論文は内容も優れている場合がほとんどである。このような学生において「高校卒業後に執筆機会が増える論文やレポートなどの文章作成技術を高校生段階のうちに身につけさせる」という効果は十分に達成されると考えてよいだろう。

短期的にでも「探究心や知的好奇心が涵養された」例として、渋谷高校の女子生徒の例をあげたい。彼女の「卒業論文」のテーマは、「一人称単数代名詞『うち』の発信源はどこか」である。女子中高生中心に使用される「うち」がどこで誕生し、どのように伝播したかを研究したもので

あった。彼女がこの研究テーマを選んだきっかけは、中学2年生の地理の時間で行った調べ学習「日本の方言の分布」だったという。彼女は、柳田國男の著書を読み、「方言圏論」などに非常に興味を持った。同時に、さまざまな人間関係の中で変化する一人称「私」の表現にも関心を抱き、高校1年から始まる「卒業論文」のテーマに決めた。順調に彼女の研究は進んだが、彼女の立てた仮説は高校2年春の連休中に関西で行ったフィールドワークの結果からもろくも崩れてしまう。しかし、仮説を立て直し、再出発を図る。最終的には、提出期限の関係上、必要十分なアンケート調査が集まらずに結論を書かなくてはいけなかったが、彼女の思いが十分に詰まった魅力ある論文に仕上がった。優秀論文発表会で、彼女の発表には多くの同級生・後輩から賞賛の声が集まった。彼女は、研究過程の中で多くのことを学んでいた。「調べ考えていくことがとても楽しかった」という。学年担任団からは「彼女はとても成長した」という声が聞こえた。

このような例は、インタビューを行った学校でも何例もあげられている。しっかりとした研究動機を持ち、だからこそ、意欲的に研究に取り組んだ生徒の満足度は高く、探究心や知的好奇心が涵養され、問題発見・解決能力の習得ができていているといえる。

6. 高等学校段階における効果的な「卒業論文」カリキュラム

高等学校段階で「卒業論文」を書くことは、前節で指摘したように、論文やレポートなどの文章作成技術の習得や探究心や知的好奇心が涵養され、問題発見・解決能力を得ることが可能なものであろう。しかし、すでに導入・実施している高等学校でさえも、多くの問題点を抱え、十分な成果を上げるためには、複数の学校の指導方法を比較検討し、さらに効果の高いものにしていく必要があろう。また、特別な教育環境や論文指導が可能な教員を集めなければ導入できないようなカリキュラムでは十分な効果が期待できない。そこで、既に「卒業論文」や「卒業研究」が導入されている学校のカリキュラムを参考に、高等学校段階における効果的な「卒業論文」カリキュラムの試案を行いたい。カリキュラムは、①生徒のモチベーションを高く維持できるもの、②書くための方法（テクニカルなもの）がわかるもの、③教員の負荷が大きくなりすぎないもの、④教員間の指導の違いを少なくできるもの、⑤生徒の自主性が発揮できるものが求められよう。

(1) 取り組む期間と時期

それぞれの高等学校がどのような背景を持っているかにもよるが、高等学校段階での「卒業論文」作成には、最低でも1年半ほどの期間が必要で長くても2年が適当であろう。その間に、生徒が普段の授業や試験勉強から解放され研究や論文作成に取り組む時間が確保でき、同時に教員が指導・添削を行える時間が比較的取りやすい長期休暇が4～5回含まれるのが望ましい。そのためには、最低1年半は必要である。2年以上になると、生徒がモチベーションを維持することが難しく、間延びした感じになってしまうことが否めない。長期休暇が4回含まれるモデル案を表2に示す。このモデルは大学受験を考慮した高等学校向けのものである。ほとんどの生徒が大学への一般受験をしない大学附属校などでは、スタートを高校2年4月に設定するとよいだろう。

表2 「卒業論文」のモデルスケジュール

学年	月	内 容
高 1	5 月	ガイダンス
		先輩たちの研究レビュー・講演など
	7 月	テーマ探し
	夏季休業	↓ 研究動機を文章化
	9 月	テーマ仮決定
	10月	テーマについてゼミで議論
		↓
	12月	テーマ決定
	冬期休業	研究方法検討
		↓
	1 月	論証のデータ収集、実験等
	3 月	
	春期休業	↓
高 2	4 月	中間発表
	6 月	
	7 月	論文仮提出
	夏季休業	添削指導
	9 月	論文本提出 要旨作成

(2) 指導の形態

指導の形態としては、同じようなジャンルのテーマ設定を行った10名ほどの生徒が集まったゼミ形式が好ましい。高等学校において10数名を超えるゼミでは教員の負担が大きくなり、十分な添削指導が行えないといった問題が生じてしまう。また、ゼミの運営は生徒の自主性が発揮されるような運営方法が望ましい。教員からの一言よりも、生徒同士のアドバイスのほうが効果的なことが多い。生徒の自主的なゼミの運営方法は、神尾・福田（2009）が早稲田大学教育学部で行っている学際的な分野での複合的なゼミ運営方法が参考になる⁽¹¹⁾。高等学校段階での「卒業論文」のテーマは多様なため、それらのテーマすべてについて一教員が専門的にアドバイスできることはなく、生徒同士のアドバイスが重要になるからである。さらに、筆者の経験では、発表者が前に出て、対面形式で発表させ議論させる形態より、車座やコの字型になって、議論させるほうが生徒同士の議論が活発になった。

(3) 配当時間

配当時間としては、少なくとも週1回の「卒業論文」のためのコマがあるのが望ましい。たとえそれが不可能でも1カ月に最低2回は「卒業論文」のことに触れる時間を取る必要がある。それは、生徒たちのペースを整えるためであり、同時にテーマについて考える時間を空けすぎない

ようにするためである。

(4) テーマの設定

テーマの設定には、十分時間をかけるべきである。多くの報告でも指摘されているように⁽¹²⁾、テーマの設定がうまくいけば、その後の論文作成がスムーズに進む。さらに、なぜ、そのテーマを選んだかということを400～800字程度で作文させると非常に効果的である。短文ではなく一定量の文章を書かせることで、テーマ設定に関し、より深く考えることができる。

ただし、テーマ設定にやみくもに時間をかけすぎると、堂々巡りになり、思わぬ深みにはまり込む生徒もいる。研究に値する「問い」になっているかゼミで議論させながら、仮テーマから本テーマへと3か月ほどでテーマを絞り込み決定することが好ましい。さらに重要なのは、仮テーマを作るための種を日常の生活や授業の中で意識できるようにしておくことである。

(5) 発表の場

中間発表や完成論文の発表、さらに優秀論文の発表会などとさまざまな段階で発表の場は設定される。「卒業論文」の取り組み度や完成度をあげるためには、出来る限り多くの生徒に聞いてもらえる場にすることが望ましい。生徒は先輩たちが行った研究、書きあげた「卒業論文」に興味関心が高く、大きな刺激を受けている。また、学校によっては研究成果を校外に向けて発表する機会を設けている場合があり、一般に向けて成果を公表することは、生徒のモチベーションも上がり、効果は高いものになる。

同様に、「卒業論文」「卒業研究」の成果集の刊行も望まれる。一部生徒の優秀作品を集めた「優秀論文作品集」は「卒業論文」を実施している多くの学校で作られているが、生徒全員の「卒業論文」要旨を集めた「要旨集」を作ることによる効果も高い。

(6) 指導上の留意点

高等学校段階での「卒業論文」を指導する時、教員は指導者であり、支援者でもありたい。カリキュラムの進行に合わせて、指導者と支援者としての立場をはっきりさせることも必要であろう。例えば、テーマを決定する際、すぐに結論が導かれたり、研究としてテーマが大きすぎる場合などは指導者としてテーマの再考を求める必要があろう。また、書きあがった論文の体裁や引用の仕方や参考文献の書き方などの不備がある場合はルールにあうように指導しなければならない。その一方、テーマ探しや研究途中、ゼミでの発表時などは、生徒の自主性が発揮できるよう支援者であることが望まれる。

さらに、指導する教員団の連携が強く求められる。高等学校で「卒業論文」を導入後、数年間は教員の指導や支援にもばらつきが出てしまい、生徒が不公平感を持つこともある。そのため、当該学年生徒全体の「卒業論文」に対するモチベーションが低下してしまうこともある。そこで、「卒業論文」を担当する教員のミーティングを持つことが必要になろう。ミーティングを持ち、その時々でのねらいを再確認し、評価の仕方を議論し、教員間の指導の違いを小さくしていくこと重要である。その結果、当該学年の「卒業論文」の完成度を上げていくことにつながり、生徒の

満足度が上がることにつながる。そして、その成果を次年度以降に引き継ぐことによって、その高等学校として特色ある「卒業論文」カリキュラムにつながると思われる。

最後に、「卒業論文」の評価は、提出された最終形である論文の出来のみで評価されることは避けなくてはならない。高等学校の段階で、論文としてオリジナリティにあふれ、高評価を受ける完成度を求めることよりも、生徒一人一人が、自分の立てた問いに対して、工夫を凝らし、解決への方法をたどれたかという、過程を評価すべきだからである。

終わりに

「卒業論文」「卒業研究」を高等学校段階で新しく導入することは、現状でも多忙を極める高等学校の教員にとって躊躇するものかもしれない。もしくは、既に導入されている高等学校の教員にとって、これらの指導がなければ日々の教材研究にもっと時間を割けると思わせるものかもしれない。

しかし、生徒の探究心や知的好奇心の涵養を期待でき、それは、日々の授業の中で論文テーマの「種」を探す活動につながり、結果的に教科の授業の充実につながるものである。さらに、論文・レポートの書き方の習得が可能であり、中等教育と高等教育の有機的な接続の意味を担うことができるものである。

本研究では、高等学校段階での「卒業論文」作成が持つ教育的な意味と効果を明らかにし、多くの高等学校で導入が可能なカリキュラムの検討を行った。一般的に「卒業論文」「卒業研究」の導入によって一定の成果を上げている高等学校の資料は集めやすく、失敗例の収集が難しく、「卒業論文」導入にあたっての問題点を十分には明らかにできたものではない。しかし、「卒業論文」「卒業研究」は、問題発見・解決型の授業として大きな効果が期待できるものである。また、「キャリア教育」として大きな成果を期待できるものである。そのためにも、多くの高等学校で「卒業論文」導入が進むよう、効果をあげた例、失敗した例を比較しながら検討し、より効果が高い高等学校での「卒業論文」カリキュラムの作成を行うことを今後の課題としたい。

注

- (1) 研究報告は早稲田大学教育研究所「所報」第10号、第12号を参照されたい。
- (2) 後藤・竹内・奥村(2009)による
- (3) 佐藤・加藤・西ら(2009)による
- (4) 高橋(2003)による
- (5) (1)に同じ
- (6) 例えば、麻布中学・高等学校の、地歴・公民分野より各自自由にテーマを一つ選んで研究し、論文としてまとめる作業「基礎課程修了論文」があげられよう。
- (7) 平成5年「高等学校教育の改革の推進について(第四次報告)」文部科学省
- (8) インタビューは、2009年に、京都市立堀川高等学校、関西大学高等部、桐蔭学園中等教育学校で行ったものを元に行っている。
- (9) 筆者の知る限り、高校生向けの論文執筆について書かれた唯一のテキストとしては、関西学院大学高等部元教員の宅間紘一が著した「はじめての論文作成術」があげられる。

- (10) 2007年度の段階でA高校ではテーマ設定に十分な時間割いておらず、指導も行われてなかった実情がある。そのため、漠然とした問いが立てられていると考えられる。
- (11) 神尾・福田の「合同ゼミ」での状況は、多様なテーマ、興味関心を持った生徒が集まる高等学校での「卒業論文」ゼミの状況と共通するものが多く、高等学校のゼミでも非常に参考になるものである。
- (12) 先行研究であげた報告や論文では、テーマ設定の重要性が指摘されている。特に、テーマ決定について論じている高橋（2003）の論文の中では、「テーマ決定により論文の作成の半分が終了する」として、東京大学付属校におけるテーマ設定のための「教官めぐり」が紹介されている。

参考文献

- 神尾達之・福田育弘（2009）学際的な分野のための《複合的》ゼミ運営法、「早稲田教育評論」24（1）、pp189-204、早稲田大学教育総合研究所
- 後藤卷子・竹内義晴・奥村準子（2009）平成20年度「卒業研究」実践と評価、「研究紀要」(46)、pp39-65、筑波大学附属坂戸高等学校
- 佐藤俊樹・加藤容子・西川陽子・木下雅仁・近藤和雅・寺井 一（2009）第6節 高校3年生 生き方を探るII(第2章 総合人間科の取り組み, VI. キャリア形成を軸とした総合人間科の取り組み)、「名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要」53、pp 101-106、名古屋大学
- 高橋亜希子（2003）高校生の"卒業研究"におけるテーマの決定—生徒の"興味・関心"の現れに焦点を当てて—、「東京大学大学院教育学研究科紀要」42、pp293-303
- 高橋亜希子（2005）高校生の総合学習の探求を支えるものは何か—東京大学教育学部附属中等教育学校の"卒業研究"の縦断調査の分析を通して—、「ネットワーク」年報7、pp12-14、東京大学
- 高橋亜希子（2007）卒業研究過程における高校生の継続的な変化—生徒から見た高校総合学習の意義と課題—、「カリキュラム研究」(16)、pp43-56、日本カリキュラム学会
- 宅間紘一（2008）「はじめての論文作成術—問うことは生きること 三訂版」、日中出版
- 藤崎雅子（2009）埼玉県立浦和高校 3回の論文作成を通じて知的探究心と論理的表現力を育成、「キャリアガイダンス」No29、pp48-52、リクルート
- 茂木好和・石井克佳・初谷和行（2007）「卒業研究」2年目の実践報告、「研究紀要」44、pp35-43、筑波大学附属坂戸高等学校